

2006年(ワ)第6484号

謝罪及び損害賠償請求事件

原告 王 子雄 外39名

被告 日 本 国

意 見 陳 述 書

—私の13歳の顔を傷つけた日本軍の爆撃を告発する—

2006年10月25日

東京地方裁判所民事第13部 御中

重慶大爆撃被害対日賠償請求訴訟原告

趙 茂蓉

- 1 私は、1928年8月24日、父趙慶雲と母文本玉の間に生まれました。
私は、3番目の子供で、兄弟は兄と姉が1人ずつと、妹が1人いました。
家が大変貧しかったので、私は、9歳の時から、自宅のあった磁器口の紡績工場で働いていました。
- 2 私は、13歳になる直前の1941年8月23日に、日本軍の飛行機が磁器口に日本軍の飛行機が落とした爆弾で、顔の右側に重傷を負いました。
その日、私は、いつもの様に紡績工場で働いていました。突然、空襲警報が鳴りましたので、私は、工場の同僚の王成芳さんや張昌模さんなど一緒に

空襲を避けるため、磁器口百岩洞という防空洞に向かって走りました。

丁度、百岩洞の近くに着いたころ、日本軍の飛行機が爆撃を始めました。私たちが目指していた防空洞は、すでに避難してきた人で一杯になっていました。まだ13歳で力も弱かった私は、防空洞の中に入ることはできませんでした。こうして私は、防空洞の出入り口のところに留まらざるを得ませんでした。そこに日本軍の爆弾が投下されました。その爆弾の破片が四方に飛び散った際、その破片の一つが私の右頬に深く突き刺さりました。

爆弾が破裂したとき、もうもうと煙や霧が立ちこめ、私は、天も地もまっ暗になったように感じました。私は、夢中で自分の手荷物をつかんで、押し合う人の群れに混じって走りました。すると突然、誰かが私の幼名（趙家秀）を呼んで、「趙家秀、どうしてお前は人の頭なんかぶら提げているんだい？」と叫んだのが聞こえました。

そう言われて、私は、驚いて手でつかんでいた「手荷物」を見ました。掴んでいた物を見た瞬間、私は、「頭だ！」と叫び、そのまま気絶してしまいました。

- 3 後で家族から聞いたのですが、私の家族は、空襲が終わった後、あちこち私を捜したそうです。夕方になって、兄が、やっと死体の折り重なっている山の中から私を見つけだしました。

兄は、滑竿という担架を探してきて、その担架に私を乗せて、歌樂山にある寛人医院まで、ゆっくりゆっくりと私を担いで運んでくれました。

病院の医師は、「あなたの妹は日本軍の爆撃で負傷したのだから、地元の保甲長から日本軍の爆撃で負傷したことの証明をもらって来れば、病院側は治療費や入院料などは免除されますよ」と教えてくれました。

そこで兄が当時の保長呉慶生から証明書をもらってきてくれ、その証明書のおかげで、私は、ようやく病院に入院できるようになりました。

私は、数ヶ月間、入院していました。その入院期間中、大きな傷を負った顔の右側の手術を受け続けました。治療を受けている間も頬の部分が腐ってきて蛆虫が湧きだし、当初の半月ほどは水も飲めない状態でした。

- 4 私が負傷した数日後にも再び日本軍の飛行機が重慶を爆撃しました。こうして重慶の一般市民は、再び空襲の被害を受けました。この日の空襲で、私の家も爆撃を受け、さらに火事の火が燃え移り全部焼失してしまいました。私の家族は、帰る家もなくなり、街頭で野宿するしかありませんでした。私は、数ヶ月間、病院に入院し、顔の傷の状態が幾分よくなってから退院しました。火事で家が無くなっていたので、私は、他人の家に一時的に住まわせてもらうなど、あちこちを流離うような生活を送らざるを得ませんでした。

このように住まいが無くなったことで生活の環境は一変してしまいました。

- 5 私の場合、空襲で右頬の部分に大きな傷を受けましたが、この顔の傷は私の生活と精神に大きな障害をもたらしました。顔の包帯を外して、初めて顔の右頬の大きな傷跡を見たとき、私は強いショックを受けました。13歳の女の子だった私にとって、顔に大きな傷跡が残ったことの苦しみは本当に耐え難いものでした。何日も何日も泣き続けたことは、今でも忘れることはできません。

私は、仕事ができるほど回復すると、再び工場で働くようになったのですが、職場の同僚から、顔の傷の事を言われる事がしばしばありました。例えば、私は、同僚からしばしば「半面美人」などとからかわれました。このうなとき、私は大変精神的に苦しい思いをしました。

このような嫌な思いを何遍も経験するうちに、私は、何時の頃からか、自然と顔の傷の部分を自分の髪の毛で隠すことが癖になってしまいました。残

念ながら性格の面でも暗い感じになったように思います。

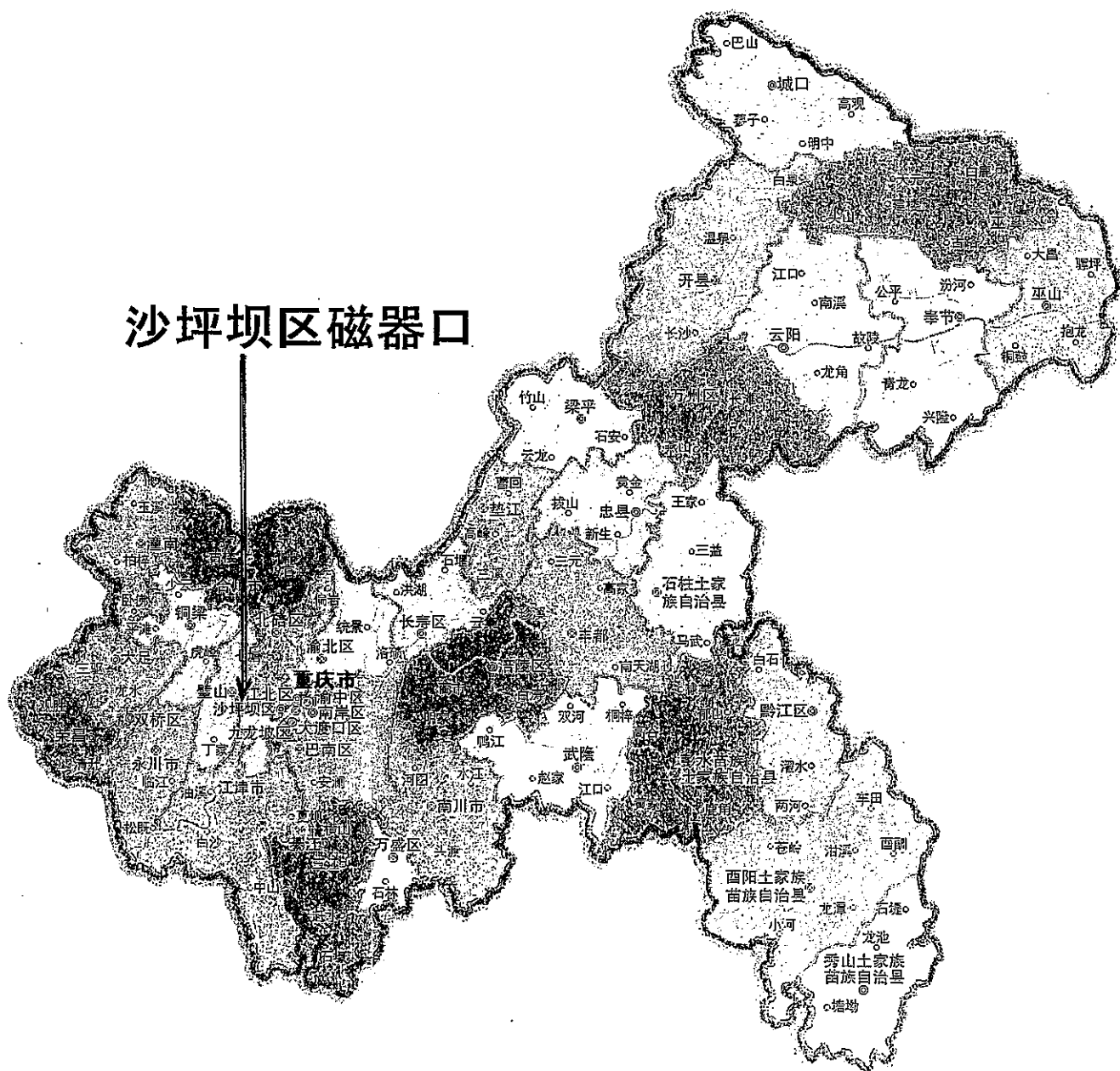
6 空襲で受けた傷は、私の婚姻や家庭生活にも多大な苦痛をもたらしました。私は、空襲によって被った傷のために、しばしば他人から蔑視され、また侮辱を受けてきました。私だけでなく、私の子供までひどいいじめにあいました。さらに私は、顔の傷のほかに、空襲で聴覚機能も失いました。このため、私は、大きな声で話してもらわないと、人の話を聞き取ることができません。しかも常に頭痛がします。

7 日本軍国主義は、重慶に対して残虐な空襲を5年間以上も繰り返し強行し、一般市民に甚大な被害を与えました。私自身も、爆撃以来現在まで、上に述べたような言葉では言い表せないほどの大変な苦しみを味わってきました。精神的な傷は肉体的な傷をはるかに越えるものでした。

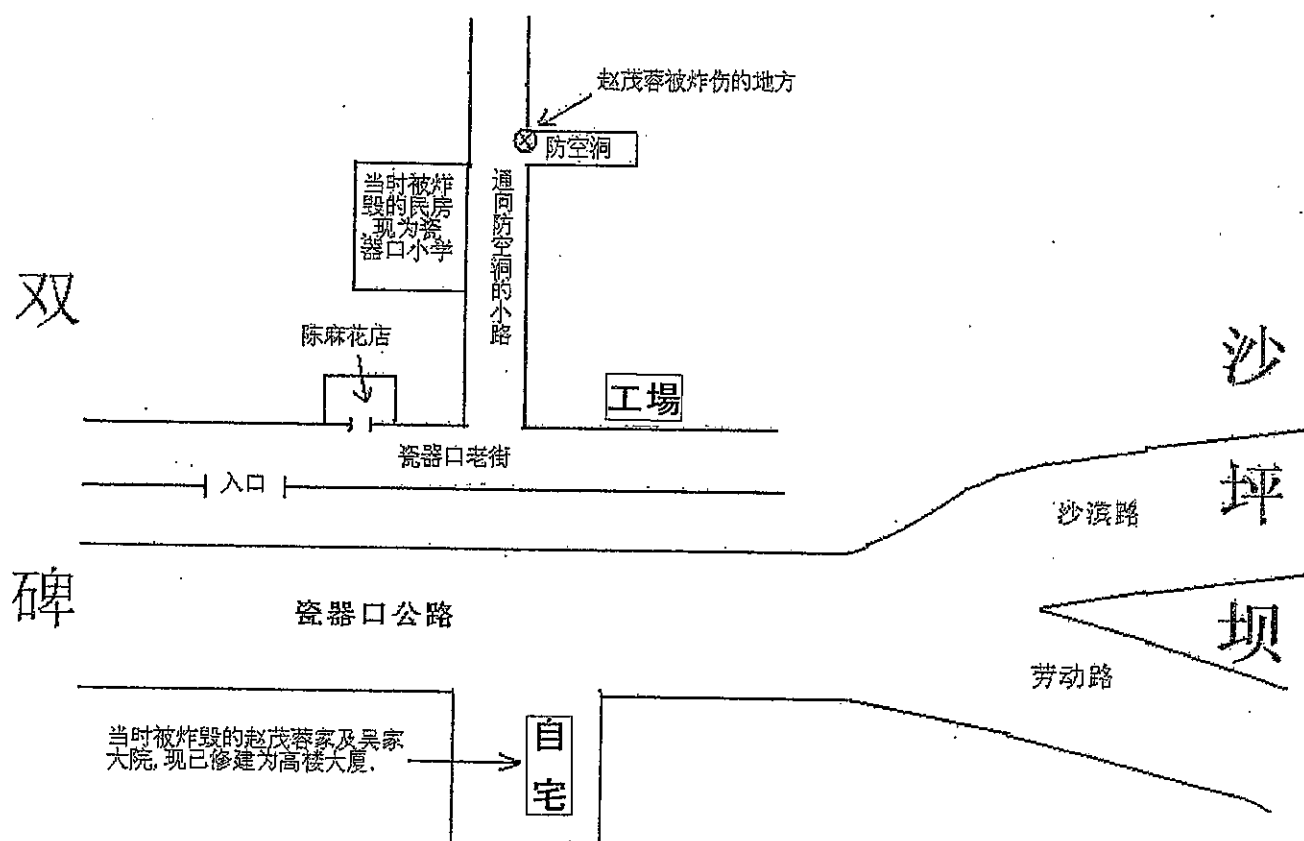
爆撃から60年以上経ちましたが、日本政府は未だに私たち重慶大爆撃の被害者に謝罪したことがありません。重慶大爆撃のような無差別爆撃は、罪のない一般住民の命を奪い、家庭を破壊する残虐な行為であり、絶対に許されない行為だと思います。私は、一日も早く、日本政府が重慶大爆撃の被害者に心から謝罪し、適切に賠償を行うことを望みます。

以 上

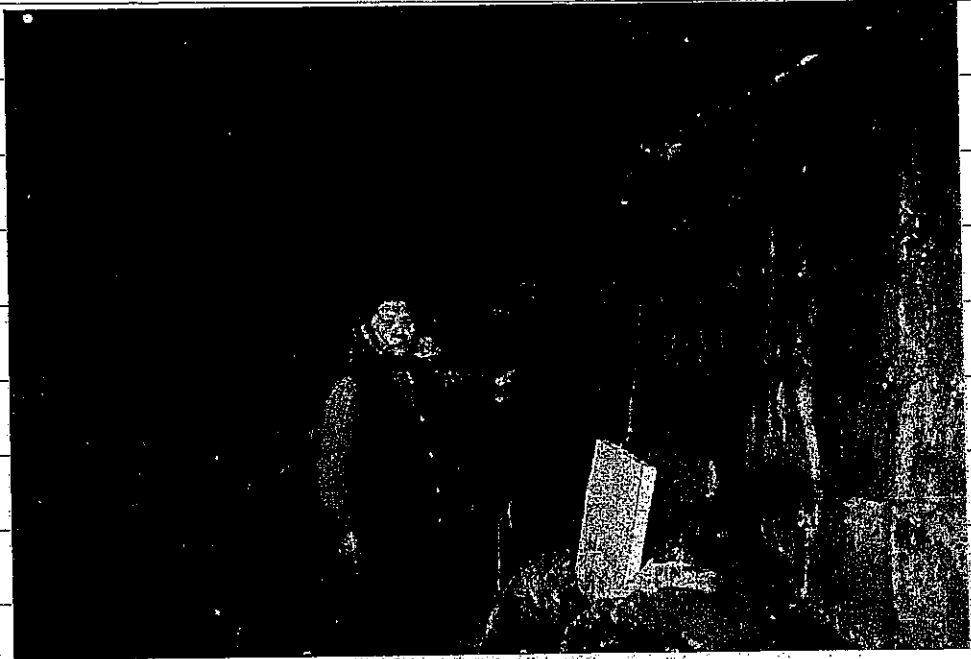
重慶市全圖



原告趙茂蓉被害關係圖



笔 录 用 纸



受害人赵茂蓉为我们指出1941年她所躲避轰炸的
防空洞的出口旧址。

摄影者：耿麒麟

摄影时间：2004年10月

CH002.1317.938.1

笔录用纸



1941年8月，日本轰炸中国重庆磁器口时，躲在防空洞口的赵茂蓉被弹片炸伤右脸部，颈部，现在仍留下伤痕（洞中挤满了人，因为当时去得比较晚，所以进不了洞中）

摄影者：耿麒麟

摄影时间：2004年10月31日

CH002.1317.938.1